

おじさんはリサイクル委員

「真美。今日は、ごみ出しをお願い。」

学校に行こうとしている私に向かって洗たく物を抱えた母が、早足でベランダに行きながら言った。

「何で。」

私は、ふくれっ面で答えた。

「まあそうおこらないで、頼んだよ。学校に行く前に出しておいてね。」

再度念押しする母に、

「はあい。」

と、不機げんな声で返事をして、ゴミ袋を抱えて家を出た。

ゴミステーションの近くまで来ると、ふうんと鼻をつくにおいがしてきた。

(ゴミステーションってくさいなあ。夏だからよけいにおいがきついのかも。)

と思いながら、さらに近付いた。朝日がきらきらと横からさしてくる。ゴミ袋をさつさと置いて立ち去ろうとした時、おじさん達三人がいることに気が付いた。おじさん達は、ゴミを出しに来た人に、

「おはよう。」

と、元気のいい声をかけている。よく見ると、月に二回、学校に行くときに信号のところに立って交通指導をしてくれている交通安全協会のおじさんだ。

(なんでここにいるんだろう。)

不思議に思いながら、

「おはようございます。」

と言った。すると、おじさんが

「ああ、五年生の山田さんだね。ゴミ出しの手伝いか。えらいねえ。」

と、声をかけてくれた。そして、私の出したゴミを置き直してくれた。そう言えば、ごみがきれいに整列している。

(おじさんたちは、ゴミをきれいに並べているのかな。)

夕食の時、母にゴミステーションでおじさんがいたことを話した。すると、母はこんな話をしてくれた。以前は、ゴミの出し方が悪く、分別せずに出す人や時間外に出す人が多くいて、近所に住んでいる人たちは、ずいぶんめいわくをかけられていた。そこで、呉市が、それぞれの町に管理してくれる人を集めるよう働きかけたのだそうだ。おじさんたちは区長さんを中心に、管理の手伝いをしてくれる人をつのった。今、音戸町には四十人以上のボランティアのリサイクル委員がいる。ほぼ月曜日から木曜日までの六時から八時三十分まで立って活動をしているそうだ。

すごいなあとは思うけど、人のためにそこまでするおじさんの気持ちは分からなかった。

「昨日は助かったわ。悪いけど今日もゴミを出しておいてね。お願いね。」

また、母から言われた。今日はカンやペットボトルを出す日だ。母があらかじめ分類してくれてはいたが、スチール缶・アルミ缶・ペットボトル・アルミのふた・ビン
のふたなどをそれぞれの容器に入れるのは簡単ではない。ゴミステーションでまごま
ごしていると、またおじさんがいて、

「今日も来たんじゃないやね。小学生なのにえらいねえ。アルミ缶はここ、ペットボトルは
ここ。」

と、につこり笑顔で教えてくれた。ほうきでまわりにちらかったゴミをはいているお
じさん。ペットボトルの回りについているビニールをはいでいるおじさん。無色とう
明のビンの中に茶色のビンが入っているので、取り出して入
れかえているおじさん。みんな黙々と仕事をしている。

「おはようございます。いつもありがとうございます。」

おばあさんがゴミを出しに来た。

「どういたしまして。」

おじさんはそういつて笑うと、ゴミの袋を受け取り、慣れ
た手つきで分類し始めた。おばあさんは、おじぎをして帰っ
て行った。おじさんの額には、汗が光っていたが、その顔は
とても晴れ晴れとして見えた。



補助資料

リサイクル委員の方へのインタビュより

Q ゴミステーションの管理は大変だと思われます。それなのになぜ、毎日この仕
事をしているのですか？

A 「大変じゃないよ。ここに来たらみんなに会えて話ができるからね。『今朝こん
なことが新聞に出とったね。』なんて毎日楽しく話ができるよ。それに、ごみ
を出しに来る人に、『ありがとう。』『こくろうさま。』なんて言ってもらえたら
うれしいしね。人の役に立っていると思うと楽しくなるよ。ボランティアはね、
一生懸命しすぎないことが大切だよ。そうでなければ、続けることができない
よ。自分はこれだけががんばっているのに、周りの人は分かってくれないとかや
つてくれないと思うようになるからね。交通安全のために横断歩道の所にと
っているのもそう、子どもたちの顔を見るとこっちまで元気になるよ。なん
でもそう、楽しんで続けないとね。」